日野山の閑居　解答

A　語句の意味と読み

(1) 生きにくい世の中。（思うように）生きていられない世の中。 ／「あり（生きている）」＋可能の「る」＋打消の「ず」。くわしくはBの問題で

(2) がまんする。じっとこらえる。 ／「祈る」の意味もあるが、ここは「こらえる」。生きにくい世を耐えて過ごしてきた

(3) 出家する。俗世間を捨てて仏道に入る。 ／直前の「家を出で」も同じく出家のこと。「世を捨つ」「世をのがる」も同じ意味

(4) 身を寄せるところ。よりどころ。（ここでは、心を引きとめる身内） ／後の「柴折りくぶるよすが」の「よすが」は「（何かをするための）場所・手だて」。同じ語でも文脈で訳し分ける

(5) 世間から姿を隠して。（俗世を離れて）隠れ住んで。 ／「跡」＝足あと・行方。世をのがれて山などに隠れ住むこと（隠遁）

(6) にしみなみ ／東・南・西・北と同じく訓読みで、「にし」＋「みなみ」＝南西のこと。同じ方角を十二支では「未申（ひつじさる）」といい、『方丈記』の辻風の場面には「ひつじさるの方」と出てくるが、ここの「西南」は「にしみなみ」と読む。教科書のふりがなが別の読みならそれに合わせる

(7) 不足しない。不自由しない。（十分にある） ／「乏し」＝足りない・少ない。それを打ち消している。前の「近ければ」（已然形＋ば＝〜ので）がその理由

B　文法

(8) 「れ」＝可能の助動詞「る」の未然形／「ぬ」＝打消の助動詞「ず」の連体形（下の名詞「世」にかかる）。 ／「あら」はラ変「あり」の未然形。「る」は下に打消がくると可能の意味になりやすい

(9) 完了の助動詞「ぬ」の終止形。決め手＝直前の「悟り」が連用形であること（四段「悟る」の未然形なら「悟ら」になる）。①の「ぬ」は未然形「れ」についた打消「ず」の連体形で、下の「世」にかかっている。 ／★連用形＋ぬ＝完了、未然形＋ぬ＝打消「ず」の連体形。「ぬ」の識別はテストの定番

(10) 「か」＝係助詞（ここでは反語の意味）。「ん」＝意志の助動詞「む（ん）」の連体形（「か」の結びなので連体形）。推量とする説明もあるので、お使いの教科書に合わせること。 ／「か〜ん（む）」の形は反語になることが多い。「〜か、いや〜ない」と訳す

(11) 強意の係助詞。結び＝「ける」（過去の助動詞「けり」）、活用形＝連体形。 ／「経（へ）」は下二段「経（ふ）」の連用形、「に」は完了「ぬ」の連用形。ぞ・なむ・や・か→連体形、こそ→已然形

(12) 「しげけれ」＝形容詞「しげし」（ク活用）の已然形。「ど」＝逆接の確定条件を表す接続助詞（〜けれども・〜が）。 ／已然形＋ど・ども＝逆接確定。「しげし」＝草木が茂って多いさま。「晴れたり」の「たり」は存続

(13) 「に」＝断定の助動詞「なり」の連用形。「し」＝強意の副助詞（下の「も」は係助詞）。全体＝「なき（ない）」を「あらず」でもう一度打ち消す二重否定で、「ないわけではない（少しはある）」という控えめな肯定の言い方。 ／「なきにしもあらず」は今でも使う言い回し。ただの「ない」と訳すとまちがい

C　主語・指す内容

(14) 作者（鴨長明）。／折々のたがひめ ／随筆なので、とくに断りがなければ主語は作者自身。「たがひめ」＝思いどおりにならないくいちがい

(15) 妻子 ／「もとより妻子なければ、捨てがたきよすがもなし」——妻子がいないから、捨てにくい身内もいない

(16) 琴・琵琶（直前の「琴・琵琶おのおの一張」）。 ／折りたためる琴と、柄をはずせる琵琶。せまい庵でも場所をとらず、持ち運びもしやすいつくり

(17) 「いま、日野山の奥に跡を隠してのち」から「継琵琶これなり」までに述べた、庵のつくり（庇・簀子・閼伽棚など）と、庵の中に置いてある物（仏の絵像・経典・書物・琴・琵琶など）のようす。 ／「かく」＝このように。直前までの説明をまとめる言葉。このあと「その所のさま（庵のまわり）」へ話が移る

D　口語訳

(18) わが身には官位も俸禄もない。（いったい）何に心をとらわれて執着を残そうか、いや、何にも残しはしない。 ／★反語は「〜か、いや〜ない」まで訳す。「何につけて」＝何に関して・何にかこつけて

(19) 何をするでもなく大原山の雲の中（の山里）に寝起きして、さらに五回の春と秋を（＝五年を）過ごしてしまった。 ／「かへり」＝回数。「春秋」＝年月。「臥す」＝横になる・寝る（そこで暮らす）

(20) そうしているうちに、六十歳という、露のようにはかない命が消えかかるころになって、あらためて晩年の住まいをつくったことがある。 ／「露」は消えやすい命のたとえ。「末葉の宿り」＝晩年の住まい。「結べる」の「る」は完了の助動詞「り」の連体形

(21) （極楽浄土を心に思い浮かべる）観念のための手がかりも、ないわけではない。 ／二重否定は「ないわけではない」。「たより」＝よりどころ・手がかり（ここは手紙の意味ではない）

日野山の閑居　解答／現代語訳

E　内容・記述

(22)　生きにくい世の中を三十年あまりもがまんして過ごし、心を悩ませてきたうえに、その間の折々の思いどおりにならないできごとから、自分の運のつたなさ（めぐりあわせの悪さ）を自然と悟ったから。　／「念じ過ぐしつつ…三十余年なり」と「折々のたがひめ…悟りぬ」の二つを入れる

(23)　一つめ＝もともと妻子がいないので、捨てにくい身内（心を引きとめるもの）がないから。二つめ＝身に官位も俸禄もなく、失うのが惜しい地位や財産もないから。　／直前の「もとより妻子なければ」「身に官禄あらず」がそのまま理由になる

(24)　仏道にかかわる物＝阿弥陀の絵像・普賢（の絵）・法華経・『往生要集』（の抜き書き）など。和歌や音楽にかかわる物＝和歌・管弦の抜き書き、琴・琵琶。→出家して念仏など仏道の修行を中心にしながらも、和歌や音楽を楽しむ心も持ちつづける、わずかな物だけの簡素で心静かな暮らし。　／★片方だけだと減点されやすい。「仏道」と「和歌・音楽」の二本立てで書く

(25)　阿弥陀仏の極楽浄土は西の方にあると信じられていた。庵の西側は見晴らしがよく開けているので、西の空に向かって極楽浄土のすがたを心に思い浮かべ（観念し）、念仏するための手がかりになる、ということ。　／庵の中に阿弥陀の絵像を安置しているのも同じ信仰から。「西」が出たら西方浄土を思い出す

F　文学史（本文全体をふまえて答える）

(26)　作者＝鴨長明／ジャンル＝随筆／時代＝鎌倉時代のはじめ（一二一二年）／兼好法師の作品＝『徒然草』。　／『枕草子』『方丈記』『徒然草』をあわせて日本三大随筆と呼ぶ

(27)　一丈（約三メートル）四方の広さのこと。作者が晩年に日野山に結んだ一丈四方の小さな庵で書いた記であることから。　／本文の（中略）の部分に「広さはわづかに方丈」とある

(28)　しかももとの水にあらず。／無常観。　／すべてのものは移り変わり、とどまることがないという見方。この場面では、それが作者自身の簡素な暮らし方として示されている

【現代語訳（全文）】

総じて、生きにくいこの世の中をがまんして過ごしながら、心を悩ませてきたことは、三十年あまりになる。その間、その時々の思いどおりにならないできごとを通して、自然と自分の運のつたなさ（めぐりあわせの悪さ）を悟った。そこで、五十歳の春を迎えて、家を出て、俗世間を捨てた（＝出家した）。

もともと妻も子もいないので、捨てにくい身内もない。わが身には官位も俸禄もない。（いったい）何に心をとらわれて執着を残そうか（いや、何にも残すことはない）。何をするでもなく大原山の雲の中（の山里）に寝起きして、さらに五回の春と秋を（＝五年を）過ごしてしまった。

そうしているうちに、六十歳という、露のようにはかない命が消えかかるころになって、あらためて晩年の住まいを（小さな庵として）つくったことがある。（中略）

今、日野山の奥に（世間から）姿を隠して住むようになってから、（庵の）東側に三尺あまりの庇を出して、柴を折って火にくべる（煮たきをする）場所としている。南側には竹の簀子を敷き、その西に閼伽棚を作り、（室内の）北側に寄せて障子でしきって阿弥陀仏の絵像を安置し、そのそばに普賢菩薩（の絵）をかかげ、前に法華経を置いている。東の端にはわらびの穂がほうけたものを敷いて、夜の寝床とする。南西には竹の吊り棚をこしらえて、黒い皮張りのかごを三つ置いている。そこには和歌・音楽（の書物）や『往生要集』などの抜き書きを入れている。そのかたわらには、琴と琵琶をそれぞれ一つずつ立ててある。いわゆる折琴・継琵琶がこれである。仮の庵のようすは、このようである。

その（庵のある）場所のようすを言うならば、南に懸樋がある。岩を組み立てて（そこに）水をためている。林の木が近いので、たきぎにする小枝を拾うのに不自由しない。（このあたりの山の）名を音羽山という。まさきのかずらが、（人の通った）跡をうずめている。谷は（木々が）茂っているけれども、西の方は晴れて見通しがきく。（西方の極楽浄土を心に思い浮かべる）観念のための手がかりも、ないわけではない。

▸ 古文・漢文の参考書のおすすめ（楽天・Amazonのリンクつき）　kotennosennsei.com/koten-kyozai-review/　　▸ 解説記事にもどる